

地域包括ケア市民フォーラム

～おうちっていいよね～

日時：平成29年11月25日 場所：気仙沼プラザホテル 参加者：164名

病気や障害があったとしても住み慣れた「我が家で」暮らすための仕組みがあります。
どんなことが出来るのか、元気なうちから聞きにきませんか？

第1部 地域包括ケアについて

気仙沼市保健福祉部高齢介護課 高橋義宏氏

地域包括ケアという考え方が生まれてきた背景は、2025年には、団塊世代が75歳以上になり、要介護認定者の増加等により、様々な課題が全国的に発生するとともに、少子化問題により、担い手不足が発生し、医療や介護保険制度の維持が大きな課題となっていきます。気仙沼市の人口推計では、2016年の高齢化率は35%ですが、2025年は、41.7%になると推計されています。

地域包括ケアは、自助・互助・共助・公助がつながる“まちづくり”であり、市民一人ひとりが、年1回の健診の受診や日頃の運動や食生活に注意するなどの自助、近所との繋がりを大切にしていく共助が大切になっています。住み慣れた地域で、どのような地域づくりをしていくのかという互助と、それらを支える共助や公助があり、それらが繋がる仕組みが地域包括ケアシステムです。

平成26年12月に、市医師会、社会福祉協議会、介護サービス法人連絡協議会、市が発起人となり気仙沼市地域包括ケア推進協議会が設立され、現在、市内の71の団体が参画しています。

平成28年3月に、各団体が連携して推進する69のアクションプランを取りまとめ、様々な活動を進めているところです。主催者である「気仙沼・南三陸地域在宅医療福祉推進委員会」では、医療と介護の専門職、県・市・町の担当者が定期的集まり、医療と介護・福祉連携の取組をしています。地域ぐるみの支え合いの中で高齢者は支える側にもなっており、交流サロンは地域ぐるみの支え合いの活動拠点として、市内全域に広まりつつあります。

平成30年度は市内40か所で継続的な集いの場として、開かれているところですが、交流サロンがきっかけとなって地域全体の福祉について話し合ったり、勉強したりする取組を始めようとしている地域もあります。気仙沼市の特徴は、少子高齢化などの課題が他の自治体より先行し、地域における連携が一層重要になっています。

気仙沼は震災でバラバラになった地域コミュニティを、市内の各地域で、もう一度つながろうとする動きが見えてきています。高齢者だけでなく、子ども、障害のある方、生活に困窮している方など、ここに暮らす私たちが一番暮らしやすい、本当に住み続けたいのは、どんなまちかということを考えていくことから、“地域包括ケア”が始まっていくものと思っています。

1 地域包括ケアにおける気仙沼市立病院の役割

気仙沼市立病院 副院長 横田憲一氏

平成29年11月開院の新気仙沼市立病院の紹介と、地域包括ケアシステムにおける本院の役割に関して講演を行った。まず、スライドを用いて新病院の内部を紹介したが、総合受付から外来部門、各診療技術部門、中央手術室、透析室、救急部門、病棟部門と見ていき、最新鋭のCT、MRIなどの機器や最高水準の放射線治療装置を備えており、十分に高度医療を提供できることを紹介した。また、東京創画会から寄贈された絵画群を外来棟2階に市民ギャラリーとして展示していることも併せて報告した。次に本題に移るが、人口減・高齢化が進む気仙沼では地域包括ケアシステムの充実が喫緊の課題であり、市立病院の役割は当地域の医療拠点であり続けることであるとの考えを話した。それは、救急医療を含めた標準的な急性期医療を堅持し、今後ニーズが増える回復期医療を強化していくことであるとの考えから、新病院では「回復期リハビリ病棟」を新設したとの経緯を説明した。

